

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520116

研究課題名(和文) コッラード・ヴィーニの公共彫刻の政治史的・文化史的解読

研究課題名(英文) The Public Sculptures of Corrado Vigni -Political and Cultural Study

研究代表者

甲斐 教行 (Kai, Noriyuki)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：60323193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：中部イタリアのフィレンツェで活動した彫刻家コッラード・ヴィーニ(1888-1956年)の伝記的消息および進歩史観を、存命する三名の弟子への取材により明らかにした。またその親交の深かったホテル・パリオーニの経営者フランチェスコ・パリオーニが依頼した同ホテル開業25周年記念メダル《ケレス》を、彫刻家が抱いた進歩史観の観点から、文明の寓意と解釈した。さらに、《ケレス》、北米の墓地のための《キリスト磔刑》、南イタリアのシチリア州ラゲーサの郵政電信庁舎を飾る女性擬人像の個人像習作を初公開し、女性擬人像の主題を同庁舎設計者マッソーニの残した文書に基づき初めて特定し、画像分析を行った。

研究成果の概要(英文)：I studied the close relationship between a Florentine sculpture Corrado Vigni (1888-1956) and a pioneering hotel owner Francesco Baglioni from the standpoint of the progressive thoughts shared by them, revealed by my interviews to the three still-living pupils of the sculpture. I analyzed the Ceres, a tondo bas-relief commissioned from Francesco Baglioni, as an allegory of civilization, and I published for the first time a terracotta study of Ceres, a plaster study of the Crucifixion for a cemetery of North America, and also some plaster studies of female allegorical figures now settled on the Post Office of Ragusa in Sicily, iconography of which I made known through my archive research in the Fondo Mazzoni, architect of this building.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・美術史

キーワード：西洋美術史 イタリア 具象彫刻 ファシズム フィレンツェ ラゲーサ

### 1. 研究開始当初の背景

20世紀イタリアで活躍したフィレンツェ出身の彫刻家コッラード・ヴィーニ(1888-1956年)は、1920年代から50年代にかけて、イタリア中の数多くの公共建築の装飾に携わった。ヴィーニへの批評家の注目度は1933年に《座る女》(カッラーラ、アカデミア)で全国彫刻コンクール国王賞を受賞後特に高まり、とりわけイタロ・タヴォラート(I. Tavolato, *Scultura di Corrado Vigni*, Milano 1934)は、ヴィーニが他のいかなる彫刻家とも異なる独創的な存在であると認め、「理性と知性に支えられたイタリアの人文主義、表現と形態のトスカーナの純粋性である」と極めて高い評価を与えている。

しかしファシズム政体と分かちがたく結びついたこの時期の具象彫刻家の多くがそうであったように、戦後はごく近年まで本格的なヴィーニ研究がなされなかった。ようやく2002年にシリガッティによって、フィレンツェの電力会社のために1933年頃制作された三点の擬人像が当時の女性擬人像流行の文脈に位置づけられたもの(C. Sirigatti, *Dee in pullover*, "Artista", 2002, pp.60-77)いまだヴィーニの全作品を総合的に論じたモノグラフは現れていない。それは政治と芸術が複雑に絡み合ったこの困難な時期と対決する精神的・物理的準備が整っていなかったためでもある。

申請者は、トスカーナ州フィレンツェとムジェッロの個人邸が所蔵する総計18点の未発表習作を撮影・検討する機会に恵まれたことから、ヴィーニの体系的な研究を志す直接的な動機を得た。平成22年度には茨城大学五浦美術文化研究所所員プロジェクト助成金を取得して研究に着手し、ヴィーニが晩年に毎夏定期的に訪れていた弟子の私邸に遺されたジェッソ・レリーフのうち6点が、イタリア北部アルト・アディジェ州ボルツァーノの「勝利の広場」(Piazza della Vittoria)を囲む全国社会保障機構会館の正面を飾るレリーフの習作であり、またジェッソ像2点が、イタリア中部ラツィオ州サバウディアのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂内の礼拝堂を飾る大理石像《われは主のはしため》の習作であることなどを究明し、『五浦論叢』(茨城大学五浦美術文化研究所紀要)第17号にイタリア語と日本語の並記により発表した(Noriyuki Kai, *Bozzetti inediti di Corrado Vigni, per Sabaudia e Bolzano*, 『五浦論叢』(茨城大学五浦美術文化研究所紀要)第17号、2010年、pp.(1)-(26))。

また調査の過程で、フィレンツェの他の三つの個人邸に計数十点のヴィーニの習作を発見し、その中にモンテカティーニ・テルメ、テットウッチョ浴場ファサード上の女性擬人像、テルニ大聖堂ファサード上の聖人像、ラグーサ郵政電信庁舎ファサード上の女性擬人像等の習作を確認した。このため、すでにボルツァーノとサバウディア

の諸作で実施したような完成作と習作の同時公開と分析の手法を他の公共彫刻にも実施していくことが可能と推測された。今回の申請と研究はこのような背景のもとでなされていった。

### 2. 研究の目的

本研究は、コッラード・ヴィーニの公共彫刻の図像を分析し、政治的・文化的メッセージがいかに表象化されたかの解明を主要な目的とするが、その前提として、1920年代から50年代に至るヴィーニの公共彫刻全作品および個人邸所蔵の習作群の実地調査が必須となる。

ヴィーニは同時代に高い評価を受け、イタリア全土のファシズム期建築の内外を飾る彫刻や記念碑制作に携わった。近年再評価の進むファシズム期建築に比し、その建築を飾る彫刻についてはなお散発的な成果に留まる現状において、従来過小評価されてきた大戦間のイタリア具象彫刻家、特にヴィーニのような重要な公共彫刻作家の作品創造の過程を示すとともに、その作品を政治的・文化的文脈の中で解読しようとする本研究は大きな意義をもつ。

本研究は従来包括的な研究が少なかったファシズム期公共彫刻の図像解釈を行うことで、この時期の政治・文化・芸術の交錯を具体的に解明しうるばかりでなく、大戦間のイタリア具象彫刻再評価の流れに貢献する可能性がある。その結果、従来のアヴァンギャルド中心のイタリア彫刻史観を是正し、多様なイタリア20世紀美術の全貌の理解に一石を投じることになる。そこに本研究の主要な特色と意義があるが、それに加え、彫刻家ヴィーニ個人に関するモノグラフ的研究という観点からも、トスカーナ州フィレンツェとムジェッロの複数の個人邸が所蔵する数十点の未発表作品の発掘と公表、またヴィーニの全作品体系中へのその位置づけなど、多くの新知見をもたらすことが期待される。以上が本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

夏期(7月末～9月前半)を中心に、必要に応じてゴールデン・ウィーク期(4月末～5月初旬)または春期(3月下旬)等にも実施するイタリアでの資料収集・実地調査・作品撮影と国内における資料解読・分析を主たる研究方法とする。

実地調査・撮影については、ヴァレーゼ、ミラノ、ブレッシャ、ピアチェンツァ、ボルツァーノ、ヴェローナ、フィレンツェ、モンテカティーニ・テルメ、カステルフランコ・ディ・ソット、テルニ、ローマ、サバウディア、ナポリ、ラグーサの公共彫刻群と、フィレンツェおよびムジェッロにあるヴィーニ作品の個人コレクター邸が対象となる。最終的に、ヴィーニの公共彫刻のすべてを実地調査・撮影するとともに、計測や素材の調査、図像の精査等ため、頻繁に作品に立ち帰る必要

がある。特にフィレンツェの二つの個人邸はラグーサ、テルニ、モンテカティーニ・テルメの諸作の習作を所蔵しているため、頻繁に所有者と交渉を重ね、調査を継続することになった。

次に作品の年代確認と、年代が不確定な作品についてはそれが確定された作品との比較考察によっておおよその年代を推定し、制作年代と対応する文化的・政治的事象を踏まえた図像解釈に取り組むことになる。これら作品の年代は、フィレンツェの美術史研究所（Kunsthistorisches Institut in Florenz）およびハーヴァード大学付属ベレンソン研究所（Villa I Tatti）における美術史文献調査によって、個々の所蔵先の情報を深めた。20世紀前半の政治・思想状況の把握に際しては、フィレンツェ国立中央図書館（Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze）等を利用した。また存命中のヴィーニの弟子たち、画家フィオレンツォ・コペルティーニ氏への面会及び書簡での取材、彫刻家ヴィットーリオ・オッタネッリ氏との面会取材、画家パオロ・ポーニ氏との電話および書簡での取材を継続した。

研究成果の発表について、イタリアの美術史専門誌 ARTISTA への投稿に際しては、同誌の編集担当でフィレンツェ在住のグリエルモ・フォンディ氏、同じくフィレンツェ在住の美術史家アレッシンドロ・ケルビーニ氏、シモーネ・ネーリ氏に校閲協力を、また図版作成で永迫志乃氏に技術協力を頂いた。また『五浦論叢』への投稿に際しては、上記シモーネ・ネーリ氏に図像調査協力を、またイタリア語版の作成でフィレンツェ在住の美術史家ルチア・マンニーニ氏に校閲協力を頂いた。

#### 4. 研究成果

(1) ヴィーニの弟子で画家のパオロ・ポーニ氏への電話と書簡による取材によれば、ヴィーニはアトリエに数年間ポーニを無償で住ませるほど愛弟子に寛大で「教師というより仲間として」接する人柄だったという。さらに同じく弟子で彫刻家のヴィットーリオ・オッタネッリ氏が語るところでは、ヴィーニは貴重な美術書のコレクションを気軽に弟子に閲覧させる気さくな人柄であったという。これらの取材からは、美への愛を分かち合う弟子たちに対するヴィーニの寛大な姿勢が窺い知れる。

また同じく弟子の彫刻家ヴィットーリオ・オッタネッリ氏によれば、ヴィーニはキリスト教信仰から距離を置いた不可知論者である一方、人類と科学の進歩を信じ、ダーウィンの進化論に情熱を傾ける進歩史観の信奉者であった。そして例えば広島への原爆投下などは、ヴィーニが信じる人類に恩恵をもたらす文明の意義とはかけ離れた、野蛮で残虐な行為としか映らなかったという。

ヴィーニが深い親交を結んだ人物として、現在もフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ駅近くで営業するグランデ・ホテル・バリオーニの創設者一族の三代目に当たるフランチェスコ・バリオーニが挙げられる。フランチェスコはフィレンツェのホテルで最初に全客室を代表電話と結び、外部や郊外と会話できるシステムを導入するなど技術革新におけるパイオニア的人物であり、ヴィーニの進歩史観との理念的な一致が見られる。この人物がヴィーニに依頼した作品は数多いが、その中にホテル・バリオーニ開業 25 周年記念メダル(1928年)のため依頼された、豊饒の女神ケレスを表した浮彫がある。その裏表両面のブロンズ浮彫がフィレンツェの個人邸に、また表片面のみのテラコッタ製習作(今回初出)がムジェッロの個人邸に現存する。テラコッタ習作の裏面に貼られた紙片にはケレスについて「農業の保護者、秩序ある文明の象徴」とあり、明らかな文明の進歩に寄せる信条告白と解される。紙片には1945年の年記が見られるが、このテラコッタは1928年の年記とヴィーニの署名のある、《羊飼》立像を中心としたアトリエの写真(フィレンツェ、個人蔵/今回初出)の背景の壁面に掛かっているものと同一と見られるため、1945年の年記は制作年ではなくテラコッタの寄贈年と考えられる。

実際、同テラコッタは他の十数点のジェッソ習作とともに、愛弟子の1人ヴァレリーオ・マンガノに寄贈されている。晩年のヴィーニがムジェッロに住む愛弟子の農家で毎夏を過ごし、その返礼としてこれらの作品を同邸に残したものであり、その中には前述したボルツァーノやサバウディアの諸作のための習作も含まれている。今回は特に、《キリスト磔刑》のジェッソ習作(今回初出)を取り上げ、その柔和な表情をヴィーニその人の後進の未来を信ずる寛大な精神に擬えて描写した。この磔刑像は北米の墓地(現時点で未特定)のためヴィーニが1932年に制作したことが1942年の新聞記事(今回初出)から明らかになった(以上、雑誌論文)。

(2) リグーリア州の海港都市ラ・スペツィアの郵政電信庁舎は、1933年に建築家アンジョロ・マツォーニにより建造された。前年の1932年に一旦はコッラード・ヴィーニによる九体の女性擬人像をファサード上に戴き、また二体の兵士像と一体の聖母像(現在消息不明)を側壁の礼拝堂に設置した。しかしヴィーニの「新古典主義的」と評された彫像群は、同地の未来派グループの圧力により取り外され、同じマツォーニが1936年に建造したシチリア州ラグーサ郵政電信庁舎のファサード上に転用された。また二体の兵士像もラグーサ郵政電信庁舎前の広場に移された。一方、未来派のプランポリーニとフィッリアは1933年、ラ・スペツィア郵政電信庁舎の時計塔内を、四種の通信を主題とするモザイク画で装飾した。

九体の擬人像については、従来「九人のムーサ」、「シチリアの九つの県」、「通信」の象徴などさまざまな言及がなされてきたが、正確に個々の彫像について考察した研究は存在しなかった。今回トレント・ロヴェレート近現代美術館 マツォーニ文庫 (Fondo Mazzoni, Museo di arte moderna e contemporanea di Trento e Rovereto) 所蔵の、1943年に建築家マツォーニ自身がタイプライターで起草した、建築を飾る絵画・彫刻作品のリスト (Maz. B38. Fasc.7 / «Opere artistiche nella Chiesa di Roma Termini: (elenco degli artisti)» [1939-1943] 1 fascicolo (18 carte); 35 cm / Comprende l'elenco degli artisti e delle opere realizzate negli edifici di Mazzoni, datato 15 ago. 1943) を参照し、ヴィーニの彫像の正確な主題を初めて明らかにした。本文書の存在自体は知られていたものの、ラゲーサ郵政電信庁舎の項は従来参照されることがなかった。今回の調査で、同文書に「ヨーロッパ」「アジア」「アフリカ」「アメリカ」「オセアニア」「地上通信」「船舶通信」「航空通信」「電気通信」「歩兵」「水兵」および今日では消息不明となっている「母親」(悲しみの聖母)が、すべてヴィーニ作として列挙されていることがわかった。しかしそれらの主題がどの像に対応するかを示す記述は存在しないため、それぞれの擬人像のアトリビュートをもとに図像分析を実施した。

最も左側に位置する擬人像は、右手でプロペラをもつ。これはファシズム期の郵政庁舎にしばしば用いられたモチーフで、「航空通信」(*Le comunicazioni aeree*)のアトリビュートである。

第二の擬人像は、双方の手で握った電極を接触させて稲妻状に電気を放出しており、「電気通信」(*Le comunicazioni elettriche*)を表している。

第三の擬人像は、頭からヴェールを被り、右手に松笠をもつ。また左足の前に煙を上げる香炉が置かれている。煙を上げる香炉はチェザレ・リーパの『イコノロジーア』によれば「アジア」のアトリビュートで、松も中東や極東で特に崇められ、小アジアの大地女神キュベレ信仰とも密接に関わる、アジアを示すモチーフである。

第四の擬人像は、右手でバナナを、左手で穀物の穂が入った豊饒の角をもつ。左脚の脇にはサボテンがある。細かく編んだ髪はアフリカ風で、九体の擬人像のうち唯一裸の胸を露出させている。豊饒の角や裸体はリーパが記述する「アフリカ」の擬人像に適合する。バナナやサボテンはアフリカの旧イタリア植民地に特徴的な産物であった。

第五の、そして中央の擬人像は、頭上に冠を戴き、左右相称の姿勢で、上向きの豊饒の角を両手でもつ。リーパによれば、頭上の冠と豊饒の角は「ヨーロッパ」のアトリビュートである。

第六の擬人像は、右手に三本の矢を、左手に弓をもち、左足の下に亀を踏んでいる。リーパによれば、弓矢とトカゲは「アメリカ」のアトリビュートで、トカゲは17-18世紀のタピスリーではしばしば亀に取って代わられた。ミラノのヴィットーリオ・エマヌエーレ二世ギャラリーを飾るモザイク・ルネッタ《アメリカ》(ラッファエーレ・カスネーディ作画、1865-67年)も弓矢と亀を伴って表されている。

第七の擬人像は、首に巻いた玉石のネックレスに右手を添え、左手を棕櫚の幹の上に載せている。また足下には巻き貝の殻が置かれている。リーパには記述のない新しい寓意だが、南国の海への暗示から、この像は《オセアニア》の擬人像と推測される。

第八の擬人像は、錨の後ろに立ち、錨の上に左手を添えている。海や航海を暗示する錨のモチーフから、やはりファシズム期の郵政庁舎にしばしば用いられた「海上通信」(*Le comunicazioni marittime*)の擬人像であることがわかる。

第九の、右端に位置する擬人像は、右足の前に有翼の車輪が置かれている。やはりファシズム期の郵政庁舎にしばしば用いられた「陸上通信」(*Le comunicazioni terrestri*)の擬人像である。

またこれら9点すべての擬人像にジェッソ習作が現存する。今回フィレンツェの二つの個人邸が所蔵する総計13点の習作の図版と寸法を初めて公開した。

ヴィーニが信奉する進歩史観と部分的に一致を見せる「機械的 海運的 航空的進歩」といったスローガンは未来派を経てファシズム体制下において継続的に追求されたテーマでもあった。そこには現代的な通信技術の称揚も含まれる。それら最新の通信手段はファシズム期イタリアの帝国主義的拡張の中で、故国と世界の諸大陸 北アフリカ植民地を含む との交易や軍事的進出と密接に関わり、その文脈にヴィーニの兵士像《歩兵》と《水兵》の表象もまた位置づけられる。

そして軍事的制圧を含む交易の結果もたらされると期待された商業的・国民的繁栄が、九体の擬人像の中央に左右対称のポーズで置かれた《ヨーロッパ》=「豊饒」によって集約されている。ヴィーニによる陸海空の通信手段、五大陸、兵士の表象は、イタリアの帝国主義的拡張という文脈における最新の通信手段への言及と、その通信手段が結ぶ世界の諸地域、さらにはアフリカ植民地等への進出がヨーロッパを繁栄に導くというファシズム期の理念を体現するものであった(以上、雑誌論文)。

ファシズム期のイデオロギーの一側面としての文明の進歩の称揚は、彫刻家コッラード・ヴィーニが私的に抱いていた進歩への希求と部分的に接点を見出す。この文脈にはフィレンツェのヴァルダルノ電気協会本部(現

国立労働銀行)に置かれ、発電所をテーマとした三体の寓意像なども含まれようが、これについては今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

甲斐教行「コッラード・ヴィーニ作ラゲースタンプ電信庁舎寓意像小論」、『五浦論叢』(茨城大学五浦美術文化研究所紀要) 第20号、pp.1-36, 2013年、査読有。

Noriyuki Kai, *Corrado Vigni e l'intelligenza umana*, "Artista -Critica dell'Arte in Toscana", 2010, pp.142-149, 2011年11月刊、査読有。

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

甲斐 教行 (KAI NORIYUKI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：60323193

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし